

## 審査結果の要旨

氏名 寺戸 淳子

寺戸淳子氏の博士学位申請論文「ルルド巡礼の宗教学的研究 - 傷病者巡礼の展開と意義 -」は、19世紀フランス、ルルドにおける聖母出現と、それ以降同地がフランス屈指の巡礼地となってゆくプロセスを、豊富な資料を駆使しつつ多角的に分析した労作である。

序章でルルド研究史を概観し、問題点を整理して本論文の目的および構成を述べた後、第1章では、聖地ルルドの空間構成と巡礼自体の概略を述べている。ルルド巡礼は何よりも、肉体的痛みをもつ傷病者たちの巡礼であることが最大の特徴であると述べられ、また、カトリック神学思想の文脈としては、聖体神学とマリア神学の発展を背景に、神の恩寵の授受を強調する流れの中にルルド巡礼は位置づけられる。

第2章では、傷病者巡礼という巡礼形態がいかにして成立したのかが述べられる。ここで特に重要なことは、ルルド巡礼はフランス共和国による近代フランスの建設に対する対抗軸として形成されたことである。それゆえ、かれらは革命と共和制を神にたいしてフランスがおかした罪と考え、ルルド巡礼はそのための「苦しみの捧げもの」なのであった。このようにして、カトリック教会は、ルルド巡礼をとおして、失われた古き良き伝統秩序を回復しようとしたのである。

第3章では、傷病者巡礼を実現するために必要不可欠な奉仕組織である〈オスピタリテ〉が分析される。かれらの意識においては、カトリック王国の再建の願望はしだいに退き、かわって、貧困問題の解決など、適切な社会関係の追求が前面に現れてきた。しかし共和国がいわゆる福祉社会を追究したのにたいして、かれらは社会的上位者によるノブレスオブリッジとして隣人愛の実践を強調した。そのような社会実現を表現するキーワードは〈ディスポニブル（他者の必要に応えられるよう準備ができた状態）〉である。

第4章では、ルルドにおける奇跡的治癒の問題が扱われる。奇跡的治癒をそのようなものとして認定することはカトリック医師団が関わっている。医師団は治癒が迷妄にもとづくものではないことを示し、かつ、傷病者の奇跡的治癒は、共和国社会がよって立つ健全者の生産性の原理をこえた原理が存在することを示しているという。すなわち、傷病者の奇跡的治癒をとまなう傷病者巡礼は、生産性原理による社会に対して、ある根本的な問いを突きつけるものなのである。

最終章である第5章は、このようなルルド巡礼が第二次世界大戦後に迎ったあらたな展開について、また最後に、今後の展望について述べて終る。ここでの新たな展開とは、傷病者巡礼が前途の「苦しみの捧げもの」の要素をほぼ払拭して、他者の痛みを見出してそれを自ら「被る」ことへの転換であった。寺戸氏によれば、ルルド巡礼は常にそこに参加する人々を深く変えずにはおこなったのであるが、その近年の姿が「被る」ことなのだという。「被る」とは、傷病者の痛みを私事性から解放して公共性へともたらしつつ、それを共有することを意味している。

以上のような内容をもつ本論文は、きわめて多面的にルルド巡礼の全体を扱っており、それゆえに論点が拡散する傾向がありはするが、論文博士として十分な質と量とを兼ね備えていることは明らかである。よって本審査委員会は本論文を博士（文学）にふさわしいものと判定する。